

川越初雁会



総会で挨拶をする岩堀会長

氷川会館で第六回総会開催

平成二十八年九月三日、くすのき祭と同日、川越氷川会館で、第六回川越初雁会総会が開催されました。

会長挨拶の後、平成二十七年年度の事業報告並びに決算の承認、平成二十八年度の事業計画案と予算案が承認されました。

引き続き、総会記念対談「霞ヶ関カンツリー倶楽部よもやま話」と題し、講師の竹間正雄プロと岩堀会長の霞ヶ関カンツリー倶楽部の歴史と裏話にまつわる対談が行われました。

総会記念対談

竹間正雄プロ（高四回）

「霞ヶ関カンツリー倶楽部よもやま話」

総会当日、氷川会館で和やかなうちに行われた霞ヶ関カンツリー倶楽部にまつわる、興味深い内容をご紹介します。

岩堀 二〇二〇年東京五輪にて、川越市の霞ヶ関CCがゴルフ競技の会場に決まり注目されています。長い間霞ヶ関CCの所属プロとして、ゴルフ界に貢献してきた竹間正雄先輩に、講演をお願いしました。今までの人生の経緯を霞ヶ関CCの変節と絡め、お話しいただきたい。

竹間 みなさんこんにちは、竹間正雄でございます。

昭和二十七年三月に川高を卒業と同時に霞ヶ関CCに採用していただきました。霞ヶ関CCの話を中心に私の人生をお話したいと思えます。

霞ヶ関CCは昭和四年十月に開場し、今年をもって八十七年になります。その間にいろいろとありました。終戦をはさんでの前後十年間は本当に大変な時期でした。昭和十六年十二月



記念対談講師 竹間正雄プロ 略歴

昭和二十七年川越高校卒業と同時に（一般社団法人）霞ヶ関カンツリー倶楽部入社、同三十年プロテスト合格。テレビ解説、テレビレッスンなど多数出演、日本プロゴルフ協会理事、埼玉県プロゴルフ協会会長を歴任。

に大東亜戦争が始まり、昭和十八年ごろより国からゴルフを自粛せよとの通達があり、退会者が増えました。またクラブの名称も変更となり、一時は「霞ヶ関田園倶楽部」という名になりました。戦局も悪化した昭和十九年には、国よりコースの半分は畑にせよとの命令があり、コースの芝をはがして小麦やさつまいもの畑にし、倶楽部内を「農耕部」と「打球部」の二つに組織しました。ただし人員の大半は「農耕部」所属でした。さらに戦局の悪化で、昭



ありし日の大澤寛先生と奥様

月、第四回展を二〇一四年八月にそれぞれ同じ川越市立美術館の市民ギャラリーで開催してきた。出品者は大澤先生時代のOBがほとんどなので、根岸先生時代から現在までのOBの出品を期待している。

「紫縁展」は、現在（高十四回）の大護皓夫君を中心に準備委員会議を重ね二〇一七年九月に第五回展を開催するよう準備している。出品対象者は川高OBであればどなたでもOKである。是非出品および鑑賞に参加され交流できれば幸いです。

現在制作中の生徒作品があり、絵画（油彩、アクリル画など）平面から立体（鍛金、鍍金、FRPの制作）などの取り組みも見えた。

「紫縁展」の準備委員会では継続を考え、現役（高校生・大学生）からの出品も受け入れることになった。

ゴルフ同好会

白田憲司（高二十二回）

ゴルフ同好会ゴルフコンペが十月十三日（木）川越カントリークラブで開催されました。今回は第十回の記



川越初雁会 第十回ゴルフコンペ 川越カントリークラブ

念大会ということもあり、四十三名が参加されて盛大なコンペとなりました。今年の夏は天候が不順で九月などは晴れの日が数日しかありませんでしたが、この日は穏やかな天候に恵まれ、岩堀会長によるご挨拶ののち和気藹々かつ順調にプレーが進みました。私は十九回卒の岸野先輩、新井先輩、同級生の田島君とのラウンドでした。

この日はたまたま大きなハンディキャップを頂いて優勝致しましたが反省ばかりです。私と田島君は最年少参加者でしたが、岸野先輩をはじめ私たちがよりスコアが良い先輩方が沢山おられ、まだまだ努力が足りない事を痛感致しました。ゴルフ同好会の松本会長や運営にご尽力頂く幹事の皆様に心から感謝申し上げますと共に、この素晴らしい会が益々盛大に続くことを願っております。

編集後記

前号に掲載した引間さんの川中の思い出によせて、娘さんからお礼の封書が届きましたので一部を紹介させていただきます。

「この度は会報に父の拙い思い出と大きな写真を載せて頂き、本当に有り難うございました。

母も供養になると早速仏前に供え大変喜んでおります。お盆には親族が集まりますので、子供や孫たちも喜んでくれると思います。」改めて、引間さんのご冥福をお祈り致します。

◆事務局からのお願い◆

年会費二千円未納の方がいらっしやいますので、お早めに納入をお願いいたします。

発行人

会長 岩堀 弘明
事務局 川越市六軒町一三十三番地
題字 吉沢翠亭(義和)
印刷 (株)櫻井印刷所

和二十年四月には完全に倶楽部を閉鎖せざるを得なくなりなりました。

昭和二十年八月に終戦を向え、豊岡の飛行場に進駐してきた米軍第八航空隊のフース少将より倶楽部の役員と話しがしたいとのこと、当時の藤田理事長が会

い、九月三十日より米軍が倶楽部を接収するということになりました。米軍側よりも畑になつていいるコースを急いで復旧せよとの要請で、機材は米軍提供、人員は日本側供出でコース整備を行い、昭和二十一年一月に工事完成。

その後、昭和二十九年四月までは日米共同経営という形で運営されておりました。自分はコースの近くに住んでおり、高二の春よりキャデールのアルバイトを始めました。普段は月曜日、春夏の休みにはアルバイトを毎日やりました。

竹間 入社してしばらくは事務作業ばかりしておりました。具体的には戦前からの会員で所在が分からない方の連絡先を探して、書類の通知とか、ロッカーの中の整理とかで、ゴルフのトレーニングどころではありませんでした。

一週間くらいしてから自分で何とかしなければと思ひ、母親に弁当を二つ用意してもらって、朝の四時から七時半まで練習しました。当時は電気釜などありませんから、母親は二時半に起きてご飯を炊き、自分は三時半に起床するという生活を続けました。

そのような訳で、もし母親がいなかったら、プロにはなれなかったでしょう。三ヶ月ほどたった頃でしたか、米軍の接収の終了と同時に、米軍が雇った英語の達者なスタート係の人が辞めてしまい、私が替わりにその役につきました。自分

は英語の方は全くできませんでしたが、二年くらい続けるうちに、話すのはだめでしたが、聞き取る方はかなり上達しました。

倶楽部のヘッドプロが師匠といえは師匠でしたが、

当時はキャデールの三分の一は男性でした。そのうちにプロの人たちと仲良くなり、当時のヘッドプロにプロにならないかとスカウトされ、入社することになりました。

今でこそ霞ヶ関CCは注目されておりますが、こういう時代があったということとを皆様にお伝えしたく思います。



対談中の講師の竹間プロと岩堀会長

この時東西三十六ホールのコースとして再開しました。これから昭和二十七年四月三十日講和条約締結まで、米軍が接収しておりました。

その間、日本人は一日一組くらいしかプレイできませんでしたが。

岩堀 今では想像ができません。昭和二十七年よりプロを目指してどのような訓練をし、どのような指導を受けたのかですか？

竹間 昭和三十年のころは、東西に分かれ各百五十名くらいはいたでしょう。レッスンの方が多かったです。月例会というのが毎月行われており、一日三十六ホールを百二十人くらいの参加者がいたと思います。大きな大会は、日本オープン、日本プロ、

関東オープン、関東プロの四つで、スポンサートーナメントはまだありませんでした。一番始めにできたのは中日クラウンズだと記憶してます。これらの試合に参加するには上位の資格が必要でした。四十歳を超えた頃からこの基準をクリ

アすることが難しくなり、四十三歳のころからレッスン中心となりました。岩堀 長い間にわたって競技をしてきたなかで、その間に一緒に回った人で印象に残った方は？

竹間 田中角栄さんとは、総理の頃五年くらいご一緒しました。以上のように、竹間先輩

には、霞ヶ関CCの復興と共に歩んだゴルフ人生を語っていただきました。引き続き、予定にはなかったのですが、岩堀会長が急遽当日持参したゴルフクラブを用いて、即席のレッスンを行いました。

に、会場の熱気が一段と上がりました。目の前でプロが実演しながらコーチする、これは説得力が全く違いました。スポーツのプロフェッショナルという存在は、人々に夢を与えるものだと思えました。

秋の散策会

原 宗康(高四十一回)

小江戸川越古寺散策

今年の秋季散策会は、十一月六日(日)に同窓会の秋季散策会として実施されました。数年ぶりに川越初雁会が担当する散策会でしたが、多くの会員の協力をも

って無事行われたことにこの紙面を借りてまずは御礼申し上げます。当日は好天に恵まれて、菊池同窓会会長、青木校長をはじめ、総勢七十余人の方が参加されました。

「小江戸蔵里」に集合し、

全体をA・B二つのグループに分かれ、Aコースは徒歩で、Bコースはマイクロバスを利用して、各寺院を訪問しました。

Aコースでは、蓮馨寺、



Aコース 養寿院山門にて



Bコース 東照宮にて

広済寺、養寿院を訪ねました。蓮馨寺では、住職である糸原恒久氏(高二十回)より寺の説明と講話を頂いた後、滅多に公開することのない太閤殿下の朱印状等の宝物を見せていただきました。

広済寺では前任職の笠松猷一氏(高九回)に境内を案内していただきました。養

寿院では先代住職である故金剛秀房氏(高十回)のご子息である金剛清輝住職より講話を頂き、境内を案内していただきました。

Bコースでは、仙波方面にバスで向かい、光西寺、中院、東照宮を訪ねました。光西寺は川越藩主松平周防守の菩提寺であり、その歴史について檀家総代の浅野忠太氏からお話を伺いました。

中院では、本殿にて住職仁平雄俊氏よりその歴史についてお話を伺いました。その後、中院の庭園にて、川越市教育委員会の田中敦

子氏から「中院と明治初期の神仏分離政策」というテーマでミニ講義をいただきました。仙波東照宮ではその歴史について代表役員の岩澤敏氏からお話をいただきました。当日参加者は通常公開されていない拝弊殿に上がり、国指定重要文化財である「三十六歌仙額」や県指定文化財である「十二聡鷹絵額」を直接目にする貴重な機会に浴することができました。

散策終了後、水川会館に全員が集合し、盛大に懇親会が行われました。

雁の記

川越散策日記

川越駅の話

荒牧 澄多記
(高二十七回)



昭和53年川越駅西口 撮影 荒牧

に、町中にお住まいの方は自転車、東上線なら川越市駅を利用したことでしょう。

川越駅は、東上鉄道が開通した大正三年(一九一四)五月一日より遅れること十一ヶ月、翌四年四月一日に川越西町駅として開設されました。どうしてここに駅を置いたのでしょうか。

今回も駅を取り上げます。川越駅です。川越初雁会諸兄の高校生時代には、利用されていない方も多し、通学の時

ートルと離れていないところに仙波河岸があります。また、菅原町周辺には織物等の工場が、多く建てられるようになってきていたようです。入間川街道に近接し、日高県道や旧城下町に近い川越市駅(当時は川越町駅)とは、異なった地域の物資の集散場所としての立地が考えられますね。

川越駅と名を変えたのは、昭和十五年に国鉄(当時)川越線が開設され、ここに駅を設けたからです。それに伴い、西口には国鉄の駅舎が建てられました。この駅舎は、寄せ棟造り平屋建てのかわいらしい洋館で、昭和の終わりまで残っていました。また、各ホームと駅舎との間は、コンクリート造の地下通路で結ばれていました。

東口の改札に入ると、すぐそこは東上線のの上りホーム。何度走って電車に飛び乗ったことやら。階段を使

モールの突き当たり位置しているように見えますが、クレアモールは江戸時代から続く所沢道、この街道に隣接して駅が設けられました。ここから東側を見ると、一キロメ



昭和53年川越駅東口 撮影 荒牧

わなくて済み、それは便利でしたけど。

また、国鉄と東武の間に改札はなくフリーパス。定期券をもって通学するようになった学生時代に、よからぬことを思いついた諸兄もおられるのではないのでしょうか。

この駅が大きく変貌を遂げるのは、再開発事業によるものです。

再開発事業とは、土地が細分化され老朽化した木造建造物等が密集している地

域において、土地を統合しコンクリート造などの不燃化した共同ビルなどを建て、土地の有効利用を図ろうとするものです。

川越では、昭和五十七年に完成した川越駅前脇田ビルがあります。これは、住宅・都市整備公団(現UR都市機構)が直接施行した駅前再開発第一号です。アトレと駅前交通広場は、川越市が施行した再開発事業によるもので平成三年三月にすべてが完了しました。

駅前広場は、自動車と歩行者が交錯しないように歩行者空間を橋上化しました。ペDESTリアンデッキといえます。それに合わせ、駅の橋上化と東武とJRの駅を分離したのです。その分かれ目はというと、両駅をつなぐ自由通路の途中に、蔵造りの町並みが描かれたトプライトのあるミニ広場があります。

天井をよく見ると、おやおや、仕上げが違っていています。そこで駅が分かれているのです。利用者にとって一つの空間と想うのがね。なおこの場所は、両駅の間として人の出会いの場となるよう考えました。三角形を組み合わせたトプライトは、閉鎖的になりがちなの空間に、天空の表情を取り込もうとしました。足元に目を落とすと、そこには「時の階」という床表示によるモニユメントがあります。

ちなみに、東口の駅前広場には、平成の時の鐘というコンセプトの「時世」をはじめとし、川越の歴史や文化、自然のエッセンスをデザイン化して取り込んでいますが、それについては次回のお楽しみにしましょう。

(訂正とお詫び 前回の新河岸駅の写真は、川越市立博物館蔵です。)

美術部今昔

川中時代の美術部を調べ術はないが、川中OBで著名な美術家として次の方々を挙げたい。岩崎勝平(中二十二)、内田静馬(中

木下 重美(高十一回) 二十二)、橋本次郎(中三十五)、大澤寛(中三十九)各氏。戦後のことを同窓会事務局に調べていただいた

第4回紫縁会出品者2014年8月



ところ、美術部の顧問は大澤寛先生が一九四八年から一九八六年までの三十八年間であった。次いで根岸和弘先生は二〇〇〇年まで十四年間、その後濱口政弘先生が二〇一一年まで十一年間、そして現在の田上朗先生が五年間顧問をされている。この間にどれだけか部員がお世話になったか計りしれない。私事で恐縮だが、私は一九五六年に入

説明会直後に美術部員となった。その年は三年生の先輩は小山さん一人で、二年生が六人ほど在籍していたが一年生は私を含め三人で部活動の内容は芸大を目指した石膏デッサンのみで変化がなかった。楽しくなったのは三年生からである。部員が増え、自分が部長で副部長に同期の尾崎勝美君を得て、いろいろな活動を展開した。春はミロのビーナス展、秋にはゴッホ展の鑑賞会を校内に呼びかけ出かけた。夏休みは千葉の御宿海岸に部員一同泊りがけで写生旅行をしたことがある。思い出すと生徒会予算の部費が少額なので、音楽部のイベントポスターを手書きして制作費用を稼いだこともあった。川女との交流を画策して写生会などを提案したが学校から見事にダメ出しを貰った。

秋の文化祭は他校と交流ができ校外外へのアピールチャンスでもあり部員一同に発破をかけたが、部員の皆はどう思っていたのだろうか。その頃の部員で国際的な芸術家になっているのが、伊ミラノ在住の長澤英俊君(高十一)、米ロス在住の関根伸夫君(高十三)である。われわれ美術部OBは顧問の大澤寛先生が退職される一九八六年に美術部OB展を川越市立図書館で開催した。その後一九九九年、川越高校創立百周年には、【百周年記念美術・書道展】を開催し、出品者を美術部OBからOB全体へと広げた。その後美術部OB展の名称を「紫縁展」として第一回を二〇〇七年十月に開催したが、その暮れに大澤先生は他界された。先生没後も「紫縁展」は第二回展を二〇〇九年七月、第三回展を二〇一三年二